

『狭衣物語』における女二の宮

——沈黙の理由——

西山裕里

一 はじめに

『狭衣物語』には、兄妹のように育つていながら、長年思慕対象であつた源氏の宮をはじめとし、乳母に謀られ筑紫へ連れ去られそうになり、入水を決意するまでに追い込まれてしまう飛鳥井の女君や、狭衣と飛鳥井の女君の娘である飛鳥井の姫君を引き取つたことがきっかけとなり、狭衣と心ない婚姻を結ぶことになってしまう一品の宮など、狭衣大将と関係を持つ複数の女性が登場する。その中でも嵯峨帝の愛娘である女二の宮は、内親王という高貴な身分でありながら、主人公狭衣大将から垣間見られ無理やり契りを結ばされてしまう不幸に見舞われる。その内容を含む巻二は「女二宮物語」とも呼ばれ、この『狭衣物語』の中でも重要な場面となっている。また女二の宮は、巻四、物語の終末場面にも姿を見せるといった重要な役どころをも担っている。

この女二の宮について特に注目したいのが密通後の狭衣大将に対する対応である。それは徹底的に狭衣を拒絶し、沈黙を貫くというものだった。なぜ彼女はそうした対応を取つたのか。この論文では、女二の宮の「沈黙」を彼女の母である皇太后宮の亡くなる前と亡く

なつた後の二つの期間に分け、本文から読みとることのできる、それぞれの「沈黙」の理由を考察していく。

なお、本論での『狭衣物語』の本文引用は全て、新潮古典集成『狭衣物語上・下』に拠るものとする。

二 女二の宮の人物像

まず、考察対象となる女二の宮がどういった人物として設定されているかを見ていく。

巻一では狭衣は源氏の宮ただ一人を想っているので女二の宮には全く関心を寄せることがないため、語り手や帝の言葉によってのみ語られるだけで、女二の宮その人は登場することはない。

巻二に入るとようやく女二の宮が姿を現す。狭衣の乳母、大式の三位の姉妹である中納言の典侍を訪れた際の事である。狭衣は箏の音に惹かれ弘徽殿へ忍び込むと、くつろぐ姫宮たちを垣間見る。その中には女二の宮もいた。

いま一所、御ものものたまはず、琴を手まさぐりにして、人々の言ひ笑ふを見たまへり。口つき、まみなどよりはじめ、ほのかなる灯の影なればにや、「げにこれこそ類なき御かたちな

めれ」と、よそに聞きたてまつりつるよりはこよなく心とどまりて、とみにも立ち出でられぬほどに、(後略)

(巻一、一三八頁)

初めてみた女二の宮の美しさに、狭衣はその場を立ち去ることもできなくなっている。これまで無関心だった狭衣の心さえも虜にしてしまうほどの美貌であることが確認される。

では、内面的なものはどうであろう。狭衣と契りを交わす以前の女二の宮は、美しい容姿については多々言及があるものの、内面についての言及は語り手の「皇太后宮の女二の宮の御かたち心ばせ、ことわりも過ぎておはしますを」という一文のみで、初めて女二の宮が登場する場面でも「御ものものたまはず」と何も語らずに、ただ「琴を手まさぐり」にするのみである。これと対比して妹の女三の宮が、

三の宮にやと見えたまふ、少し起き上がりて、「その絵はなど見せぬ。心憂かりけり」など恨みたまふ気色、幼びてうつくしげに見えたまふ。(巻二、一三八頁)

と活発で幼く愛らしい様子に描かれていることから、女二の宮は自己主張があまり強くなく、おとなしい性格であるということが読みとれる。

また、女二の宮は狭衣に多くを語らず、唯一狭衣にかけた言葉は、「こは誰ぞ」というたった一言である。これも、狭衣とは知らず、侵入者が誰かということを問う言葉であるため、狭衣にかけた言葉として良いかどうか疑問である。しかし、これを除けば女二の宮は少なくとも本文中にある限りは狭衣に対する言葉をただの一つも発していないことになる。また、手紙も同様にただの一行も返事を

返していない。物語の終盤、狭衣が帝位に就いた後の対峙でさえも女二の宮は決して狭衣と会話をしようとしなない。狭衣の手紙への返歌も心の中では詠じていたが、その和歌を書きつけた「反故」を見られてしまった後は、決して外へは漏らさぬように心の内に秘めたままにしていた。そこには狭衣への強い恐怖と恨みを感じるとともに、女二の宮の覚悟の強さが窺える¹²⁾。では、最初から女二の宮はこんなに頑なな女性だったのであろうか。

女二の宮が初めて登場したとき、周りにいる女房や妹の女三の宮が談笑している横で「御ものものたまはず、琴を手まさぐりにして」いたことから、元々、物静かで、控え目な性格だということが窺えていた。また、女二の宮は狭衣から無理やり契られた後、そのことを話せずただ床に伏せるだけであり、懷妊が発覚したあとも、何も語ることができず、ただ母である皇太后宮に守られるだけのか弱い存在であった。しかし、母の死後、自らの意思で何も語らない女性へと変化を遂げるのである。巻三、狭衣の絵を見せられる場面で、女二の宮は母を思う。

「身ひとつだにあらず、あながちなりし御心がまへのほどを院も聞かせたまふやうもあらむかし」と、ことひとよりも御心のうちはいといとほしう、「この世もかの世も、ただ憂き身ひとつのゆかりにやつれたまひぬるぞかし」とおぼしやらるる御心のうちなどは、ながらふるもあさましく憂くのみおぼし知られながら、「げに、かう死にせぬ例もありけるを、こよなかりける御心の深さかな」とうらやましう、なき影の見たまふらむも尽きせず恥づかしうぞおぼされける。

うきこともたへぬ命もありし世にまだながらふる身をいか

にせむ

などとおぼしつづければ、今はいみじき言を尽くしたまふとも、つらきをあらぬには、なしがたげなり。

(巻三、一三頁―二四頁)

狭衣が今更どんなに言葉を尽くして訴えようとも、亡き母のこと考えると許す気にはなれない。母への思いから女二の宮は狭衣に対し頑なな態度をとっているのである。つまりは、母の死が女二の宮を自分の意思を持った女性へと成長させたということであり、「沈黙」の内容も彼女のこの性質・性格の変化により、皇太后宮が亡くなったときを境にして変化していったと考えられる。

三 「第一の沈黙」の理由

はじめに提示したように、「第一の沈黙」とは狭衣との密通から皇太后宮が亡くなるまでの期間を指すものとする。

女二の宮は狭衣と密通してから、ほとんど口を開こうとせず、ただ衣を被って泣き臥すばかりである。この「第一の沈黙」の特徴は、誰にも何も言わないというよりはむしろ、恥ずかしくて言えないということである。狭衣が手紙をよこした時も、

宮はあるかなきかの御心地にも、「これをさへ散らして、大宮の見たまはむこと」とおぼすに、いとど死に果つる心地せさせたまへば、「ひき隠してよ」と言はまほしけれど、残りなく言ひ知らせつらむも恥づかしくて、えさものとあまはす、いとど堰きやるかたもなげなる御気色なるを、(後略)

(巻二、一五四頁)

この「恥づかし」と言う感情は狭衣が侵入してきたときから感じ

ていたもので

いみじき御心まどひのうちにも聞きや知らせたまふらむ、いとど恥づかしくいみじきに、ものもおぼえさせたまはず、ただひき被きて泣きたまふ気配も、(後略)

(巻一、一四〇頁)

げにうとましかるべきさまにもあらねど、かばかりにも、知らぬ人にけ近く見えさせたまふは、あさましく恥づかしうおぼしめされて、(後略)

(巻二、一四一頁)

と、この二つを見てわかるように、女二の宮は終始「恥づかし」く思っている。また、狭衣と契つた後の描写も、

中納言にさへ言ひ知らせむほどの恥づかしさ、心憂さをおぼし入るに、いとど「ただ今なくなりぬる身とがな」とおぼされ、やすきこととは、身も浮きぬばかりに流れたる御涙、(後略)

(巻二、一四二―一四三頁)

と、「恥づかしさ」を感じている。これについて片岡利博氏は、密通の前・後ともに、女二宮の心理を描写した箇所は少ないが、それらは一貫して、密通という事態をひたすら恥じる宮の心理を描いている(中略)ただ、恥ずかしがり、死にたがるばかりで、事態に対してなんら現実的に対処しようとならない女二宮の態度が密通の真相を隠蔽することとなったのである。

としており、この女二の宮の「恥づかし」という感情こそ、密通の真相を隠蔽した、つまりは女二の宮が口を閉ざしてしまった理由と考えることができる。では、この「恥づかしさ」は何に対しての「恥づかしさ」なのであろうか。私はこれほどまでの「恥づかしさ」を感じ理由には母である皇太后宮の考えが影響しているのではないかと考える。

皇太后宮は、「ものに少し際だけきまですくよかに、氣高く重りかなる御心」であると本文中に描かれている。また、「后もこの宮をば類なく思ひかしづききこえさせたまひて、世の常の御有様などおぼしかくべきもなきを」「いでや、宮たちは何となくて過ぐしたまへるこそよけれ。軽々しき御有様に思ひよそへられたまはむことあるまじきこと」と、皇女の結婚には反対の立場である。女二の宮もそうした考えに影響されていたのであろう。

ものに少し際だけきまですくよかに、氣高く重りかなる御心にて、我が宿世いと口惜しうおぼし続けらるるに、人目もえつつみあへず涙こぼれて、堰きかねさせたまへる氣配を、宮、大殿籠りたるやうなれどきかせたまふに、やがて消え入るやうにぞおぼさるる。

(卷二、一四五頁)

と、女二の宮は感じている。また、先ほどあげた、狭衣からの手紙を中納言の典侍から渡された時の描写でも、「この手紙を人目に触れられて、母宮に見られてしまつたら」と絶望のあまり死に果ててしまふような心地がしている。こうしてみると、女二の宮と母宮の関係がとつともなく深いものであることがわかる。井上真弓氏はつまり、この事件に対する母の態度は、闖入者の詮索よりもむしろ闖入を許した女二宮に対する悲憤へと向けられている。(中略)「見たてまつらん」の語(中略)が多出し、大宮の一方的な視線により女二宮の生に大宮の生が畳みこまれて、二者はその限りで同体化されているといえよう。

としている。井上氏は「大宮の一方的な視線により女二宮の生に大宮の生が畳みこまれ」としているが、最初は一方的なものであったと思われるその視線は、母宮の思想の影響を受けて育った女二の

宮の側からも、「自分の恥は母の恥となり、自分が情けないから母が嘆くのである」という、双方向的な視線となっていたと私は考える。井上氏の言う「二者の同体化」が行われていたからこそ、皇女という氣高い身分でありながら男に侵入され、無理やり契りを結ばされてしまったということに、死を願うほどの「恥づかしさ」を感じたのではないだろうか。この時点では狭衣に対する恨みよりもむしろ、母に顔向けできない行為をしてしまった「恥づかしさ」の方が女二の宮の心を支配しており、「恥づかし」い自分をつらく思っていたのである。

狭衣との密通から、先述の和歌を例外にすると、彼女の思いや考えていることは常に「おぼす」「おぼさるる」などの語で示されてきた。そして、その内容は、「恥づかし」という言葉がその大半を占め、あの密通の日から常に、あんな屈辱を受けたにもかかわらず、その屈辱を背負ったままこの世に存在しているということ自体が「恥づかし」なことであると女二の宮は自分を責めていた。そのため、これ以上「恥づかし」い思いをしたくないという思いから、彼女は「のたまふ」ことができなくなったのではないだろうか。「第一の沈黙」の理由はそこにあり、いわば、自分を守るための「沈黙」であったと言ふことができるのではないか。

四 「第二の沈黙」の理由

母が亡くなるまでは、狭衣への恨みというよりもむしろ皇女として密通されてしまったことへの「恥づかしさ」がその「沈黙」の理由であった。しかし、母が亡くなったことにより女二の宮は自分の意志をもった女性へと変化をとげる。

皇太后宮が亡くなったことを知った女二の宮は、

(前略) 我ゆゑつひにかくなりたまひぬるに、片時にてもながらへて、一人まどひたまふらむ道の行方も知らざらむは、いみじう悲しかるべきをおぼしこがるれど、げに憂き堪へたる御身にや、煙の雲となりたまふにもつひに立ち後れたまひて、七日の果てかたにもやうやうなりぬ。

(巻二、一八五頁)

と、責任を感じ、一人生きながらえていることに負い目を感じる。

はかなく月日も過ぎて、御四十九日なども果てぬれば、内裏よりは、「疾く参らせたまへ」とのみうしろめたがり聞こえたまへど、「同じさまにうち具しきこえたまひて参りたまはましかば、何事も心よりほかなるさまにて、心憂く恥づかしき有様ももて隠されたてまつらましを、何事に思ひ慰めてかは、憂きを知らぬさまにて、恥に死せぬ身をながらへむ」などとおぼし沈めば、起きだに上らせたまはぬに、大将の御事も「年返らむままだ」と急がせたまひて、乳母たちのもとに用意すべきことどもなど仰せられたるを、うれしきことに誰も思ひ急ぐを聞かせたまふにも、おぼつかなきことをさへおぼしこがれて絶え果てたまひにし、海人の刈るてふ心強さは、「世に知らずつらう心憂し」と、人知れずおぼし知らるるに、(後略)

(巻二、一八七—一八八頁)

この本文から、母である皇太后宮が亡くなり自分の「恥」を隠してくれる存在がいなくなったことにより、女二の宮が、少しずつこれからの事を自分で考え始めるようになったことが窺える。また、狭衣を恨みの対象として初めて認識し、そんな狭衣との結婚から逃れるために自らの意思を行動や態度で示すようになる。

(前略)「いかにして、さることのなからむさきに命絶えずは、身あらぬさまになしてばや。さばかり思ひつつ消えたまひにし御身の苦しきなどを、知らず顔にてはいかでか過ぐさむ。身の上よりほかにこの世におぼしむすばほることはなかりしものを」など、

(中略)

ただたけきこととは御湯などをだに見入れたまはで、「さばかりおぼし入りたりし身を、今まで後らかしたまへるが心憂きこと」と、「あはれともおぼし出でば、今日明日迎へさせたまへ」とのみおぼしこがるればにや、げに日に添へて頼もしげなきさまにぞなりたまひける。

(巻二、一八八—一八九頁)

「第一の沈黙」の時とは明らかに女二の宮の心理が違っており、それに行動が伴うようにもなっている。やはり、守ってくれる存在である母を失った事が女二の宮の変化の最も大きな要因であるといえる。

そして、この後の本文で女二の宮の変化が決定的となる。

内裏よりは、「いま一度見むとはおぼされぬか」と、かつは恨み、慰めきこえたまふこと、日にいくたびとなく、御使立ち替りつつ参れど、何のかひもなく、限りとおぼさるる夕つかた、内裏より参りたる少将の内侍を召し寄せて、「さかしきやうにや」と恥づかしくおぼさるれど、暗き紛らわはして、「日ごろは、よろしくもやと待ちつるに、今日などは留まるべき心地もせぬを、私の御しるしもやと試みまほしくなむ。『いかなりともしばし見むとおぼしめさば、今宵のほどにも』と奏して、案内言へ」とのたまはすれば、泣く泣く参りて、「かくなむ」

と奏すれば、とばかりものもえのたまはせず。

(巻二、一八九—一九〇頁)

女二の宮は出家という願望を自らの口から告げる。これまで「おぼす」「おぼさるる」の語で表されてきた女二の宮の思いがようやく「のたまふ」という語で表されることになった。この後、帝は最愛の娘である女二の宮の出家を許すことができず「あるまじきこと」と出家を止めるが、女二の宮が「消え果て」そんな容態のなか、出家への強い思いを「のたまふ」ことで、泣く泣く出家を認めるのであった。そして、出家の甲斐あってか、女二の宮の容態は快方に向かうのである。

これまで守られるだけの存在であった女二の宮は皇太后宮の死を境に自分の意志を「のたまひ」、貫くことのできる女性へと変化を遂げた。この場面が、「第一の沈黙」から「第二の沈黙」へと変わる決定的な分岐点であるといえよう。

女二の宮の出家を知った狭衣は、自分の思いを抑えきれず再び女二の宮の寝所へ侵入を試みる。しかし、狭衣の最初の侵入から心休まることのなかった女二の宮はその侵入を察知し、一瞬早くその手から逃れる。この構図は、『源氏物語』『空蟬』の源氏の侵入場面によく似ており、空蟬同様、女二の宮も、男を拒否する女君としてイメージされることになる。「第一の沈黙」では「恥づかし」くて何も語ることでできない「沈黙」であったが、この侵入の場面では自らの行動により狭衣を拒否している。

女二の宮の出家後の侵入であれば拒否されたにもかかわらず、狭衣は女二の宮に対する執着を強め、何度も彼女に手紙を送っている。

この後は常にゆかしく思ひきこえさせたまへど、いかでかは思ふままにも見たてまつりたまはむ。人知れずいとどのあはれに、おほしあまりては、言ひ知らぬことどもをこまごまと書きつづけつつ、中納言の典侍していみじう忍びつつ参らせたまへど、まいて今さらに御返りなど書き交はさせたまふべきならねば、そのしるしつゆばかりもなし。

(巻二、二二五—二二六頁)

このように、狭衣は女二の宮へ自分の思いを手紙に書いて訴えるが返事をもらえらるはずもない。同じような文が、巻三に入ってから何度も登場する。本文中、狭衣が何度も女二の宮に手紙を送る様子が描かれてはいるものの、その手紙に女二の宮が返事を送ったことは一度もなく、女二の宮が返事をしないことは「例の」「常のこと」となど表されている。父である嵯峨の院に促されたときですら、頑なにその勧めを断った。また、狭衣が帝になってからも決して返事を返そうとはしない。それだけ女二の宮の決意が固かったということがこれらの記述から窺える。

しかしながら、たった一度女二の宮の返歌が狭衣の手に渡ってしまったことがあった。

宮、つくづくとおほしつづくること多かるなにも、この「末越す風」の気色は、「過ぎにしそのころもかやうにこそは」とすこし御目のとまらぬにしもあらで、筆のついでですさびに、この御文のかたはらに、

(1) 夢かよ見しにも似たるつらさかなうきはためしもあり
じと思ふに

「起きふしわぶる」とあるかたわらに、

(2) 下萩の露消えわびし夜な夜なもとふべきものと待たれやはせし

(3) 憂き身には秋もしらるる萩原や末越す風の音ならねども
など同じ上に書きけがしたまひて、細やかに破りて、典侍の参りたるに「捨てよ」とて給はせたるを、隠れに持てゆきてみれば、「もの書かせたまひたりけり」とみるに、「うしろめたきやうにはありとも、いとほしくのたまへるに、これ面隠しにせむ」とおもひて、

「かかるものをなむ思ひかけぬ所にて見つけて侍りつるを、奉るもおぼろけならぬ御心ざしに侍り。さは今はおぼし慰めよ」

など聞こえさせたり。

(巻三、八七―八八頁)

返歌を詠むといつても、正式に狭衣への返事を書いたわけではなく、狭衣からの手紙の上に書きつけたもの、一品の宮との結婚に消極的な狭衣の態度を、かつての自分への態度と重ね合わせ、狭衣の冷淡な態度への恨み、反発を歌にしたのである。これら三首を見ると、あのときの狭衣の冷淡な対応を思いだし、思わず歌を詠んでしまったという印象をもつ。それだけ、狭衣への恨みが深いということが読みとれる。

中納言の典侍はこのときの「反故」を狭衣に見せてしまう、その事を知った女二の宮は、この後返歌を詠むことはあっても、心の中で詠じるだけで決して心の外には漏らさない。それほど徹底して狭衣への「沈黙」を貫き通すのである。

では、この女二の宮の決意の固さはどこからくるのか。

かうのみつめる御文の数もさだかに御覧じつづけねば、なか

なかなかとも知らせたまはぬに、床の上の形身などは、「残りなう聞きあらはしたまひてけり」とおぼすに、「なべての人もみなかくのみこそはあらめ。されど、よその人は、なにしにかはかうも言ひ聞かせむ。中納言などをも、その折は知らぬこそは思ひしか」とおぼすに、その折の御心惑ひに劣らず恥づかしういみじきにも、「身ひとつだにあらず、あながちなりし御心がまへのほどを院も聞かせたまふやうもあらむかし」と、こ

と人よりも御心のうちはいとほしく、「この世もかの世も、ただ憂き身ひとつのゆかりにやつれたまひぬるぞかし」とおぼしやらるる御心のうちなど、ながらふるもあさましく憂くのみおぼし知られながら、「げに、かう死にせぬ例もありけるを、こよなかりける御心の深さかな」とうらやましう、なき影のみたまふらむも尽きせず恥づかしうぞおぼされける。

うきこともたへぬ命もありし世にまだながらふる身をいか

にせむ

などとおぼしつづければ、今はいみじき言を尽くしたまふとも、つらきをあらぬには、なしがたげなり。「今はなほかやうの事もいとかたはなるを、見ぬわざもがな」とあらぬ所のなきもわびしうおぼし乱れながらも、言に出でてこそそのたまはせねど、いと苦しき御気色を見れば、いかがは聞こえむ。

(巻三、一二三―一二四頁)

ここで女二の宮は狭衣が若宮の秘密を知ってしまったことについて、あの密通、出産のときに劣らないほどの「恥づかしさ」を感じる。ここで注目したいのが「身ひとつだにあらず」という表現である。⁽⁵⁾これは、この「恥」が自分だけの「恥」ではなく、この

秘密を隠し通して死んでいった母、皇太后宮の「恥」でもあるということ意味しており、一節でも述べた、井上氏⁶⁾の言う「二者の同体化」が行われていたことが改めて確認できる。あのときの自分の過ちのために、母に恥を与え、その心労から母は亡くなったというのに、その元凶である狭衣から手紙を送り続けられている自分の状況が母に対して「恥づかし」くてたまらないといった女二の宮の心境が、この本文から読みとれる。こういった思いがあったからこそ、「今はいみじき言を尽くしたまふとも、つらきをあらぬには、なしがたげなり。」という一文につながっていくのだ。

次に、女二の宮の和歌を見ることで、「沈黙」の理由について探っていききたい。

以下に女二の宮が物語中に詠んだ七首の和歌を挙げる。⁽⁷⁾

①一吹きはらふ四方の木枯らし心あらば憂き名を隠す隈もあらせよ

(巻二、一七四頁)

②うきこともたへぬ命もありし世にまだながらふる身をいかにせむ

(巻三、二四頁)

③夢かたと見しにも似たるつらさかなうきはためしもあらじと思ふ

(巻三、八七頁)

④下萩の露消えわびし夜な夜なもとふべきものと待たれやはせし

(巻三、八七頁)

⑤憂き身には秋もしらるる萩原や末越す風の音ならねども

(巻三、八七頁)

⑥残りなくうきめを刈りし里のあまをいまくりかえしなにうらむらむ

(巻三、一六四頁)

⑦いかばかり思ひこがれしあまならでこのうき鳥を誰か離れむ

(巻四、一九五―一九六頁)

これら七首を見ると①では、自分の「恥」を隠してほしいと歌っており、狭衣への恨みは感じられない。しかし、皇太后宮が亡くなった後に詠んだ②以外の③④⑤⑥⑦の歌は一転、冷淡な対応をとった狭衣への恨み、反発を歌にしている。

皇太后宮が亡くなった後の女二の宮の和歌は、狭衣への強い恨み・反発が込められていることがわかる。これは、女二の宮の出家後、狭衣が彼女に対する執着を強めたことも影響していると思われるが、あのときを振り返っての「今さらもう遅い」という狭衣に対する反発や抗議の気持ちこそうさせたのであろう。

「第二の沈黙」では、狭衣への恨み・反発から「沈黙」を貫き通していた。「第一の沈黙」のときの「恥づかし」という感情も、亡き母が狭衣からしつこく求愛されている現在の状況をどう御覧になつているかという「恥づかしさ」はあるが、そのために口がきけないということはなく、むしろ、自分の意志をはっきりと持った、狭衣に対する拒否・拒絶といった形で「沈黙」といえる。

五 おわりに

『狭衣物語』の女二の宮は、物語の最後まで狭衣を徹底的に拒絶し、「沈黙」を貫き通した。ではその「沈黙」の理由は一切何だったのか。今回、私はその理由を皇太后宮が亡くなるまでと亡くなった後、二つの期間に分けて論じた。その時を境に、女二の宮は人として成長し、その「沈黙」の理由の性質も変化したからである。

「第一の沈黙」では、密通されたことの「恥づかしさ」からの、何も語ることのできない「沈黙」、その「恥づかしさ」から自分を

守るための「沈黙」であり、狭衣に対しての拒絶の意味は全く含んでいなかった。しかし、自分を守っていた存在である皇太后宮が亡くなった後は、しだいに自らの意志で行動し始め、狭衣との婚姻を避けるために「出家」という意志を「のたまふ」ことができるようになっていった。また、自分のせいで亡くなってしまった母に恥ずかしくないように、出家後執着を強め、幾度となく求愛してきていた狭衣に対して、「沈黙」を貫き通すという姿勢を見せた。この「第二の沈黙」は「第一の沈黙」とは異なり、紛れもなく狭衣自身に対しての拒絶の意味での「沈黙」だといえる。

こうして見ると、「第一の沈黙」と「第二の沈黙」では全く「沈黙」の性質を異にするということがわかるが、二つの「沈黙」には共通部分もある。それは、母である皇太后宮の影響が強いということである。「第一の沈黙」では、密通という「母に顔向けできないような恥ずべき行為をした自分」に「恥づかしさ」を感じており、それが「沈黙」の最も大きな理由となっている。また、「第二の沈黙」では、狭衣に求愛されている今の状況を母に対して申し訳なく、「恥づかし」く思い、母に「恥づかし」くないように生きるために狭衣に対しての拒絶を意味する「沈黙」を貫き通している。どちらの「沈黙」も母という存在に対しての思いから「沈黙」という行動に至っているのである。

また、「恥づかし」という感情も「沈黙」の理由の大きな要因として共通していることがわかる。しかし、「第一の沈黙」の「恥づかし」という感情は、母の陰に隠れ、「死んでしまいたい」と嘆くだけで、何も語ることでできなかった「沈黙」の直接の要因であったのに対し、「第二の沈黙」では「身ひとつだにあらず」の語で示

されるように、自分の「恥」は母の「恥」となってしまふのだから、母に「恥づかし」くないように生きなければというように思っていることからわかるように、「第二の沈黙」では「恥づかし」という感情は直接の要因ではなく、「沈黙を貫こうという決意」の単なるきっかけにすぎないものとなっている。

女二の宮の「沈黙」は「語ることでできない沈黙」から、「決して語ろうとしない沈黙」へ変化した。この「沈黙」の変化は、女二の宮自身の成長を意味していると考えられる。そして、その成長の裏側には母、皇太后宮の存在があった。もちろん「沈黙」しなければならぬような事態に陥ったのはあの密通事件がきっかけではあったが、「沈黙」という行為を引き起こす、最大の理由、要因となつたのは母である皇太后宮だったといえるのではないだろうか。

【本文引用】

・ 鈴木一雄 校注『狭衣物語上』新潮古典集成（新潮社、一九八五年）
・ 鈴木一雄 校注『狭衣物語下』新潮古典集成（新潮社、一九八六年）

注(1) 片岡利博氏は『狭衣物語』構造論―巻二の女二宮物語について―

（『語文』四八号、大阪大学、一九八七年二月）で「この巻二に配された女二の宮をめぐる物語を「女二宮物語」とし、（後略）」と述べている。

(2) 土井達子氏は『狭衣物語』女二宮の身体をめぐる―表出の方法あるいは（媒体）としての身体（『岡大国文論稿』二九巻、二〇〇一年三月）で、狭衣の侵入場面を挙げ、「言葉を発表すれば応えたことになってしまい、コミュニケーションが成立してしまう。あくまで狭衣との交渉を断絶したい女二宮にとって、いかなる言葉も狭衣の前では飲み込まれ

てしまうのであるが、同時に、仏前にて狭衣に近づかれたことに対する衝撃、動揺、極度の緊張と恐怖、不快な感情から「声」や「言葉」が失われた状態にあって、そうした宮の心情を「汗」が伝えるしかないのである」と述べている。

- (3) (1) に同じく片岡利博『狭衣物語』構造論―巻二の女二宮物語について―

- (4) 井上真弓『狭衣物語の語りと引用』第五章女君の母子関係（笠間書院、二〇〇五年）井上氏はこの論文で、女二宮の将来を思案する言葉としての「心憂し」が大宮の心情を語ることに転換されているとも述べている。
- (5) この部分、小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語②』新編日本古典文学全集30（小学館、二〇〇一年）では、「一重にもあらず」という表現になっている

- (6) (3) に同じく井上真弓『狭衣物語の語りと引用』第五章女君の母子関係（笠間書院、二〇〇五年）

- (7) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語①』新編日本古典文学全集29（小学館、一九九九年）、小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語②』新編日本古典文学全集30（小学館、二〇〇一年）では①「吹きはらふ」が「未はらふ」に、②「まだ長らふる身をいかにせむ」が「長らふる身ぞ恥にしにせむ」に、⑤「憂き身には秋もしらるる」が「身にしてみて秋は知りにき」に、⑥「うきめを刈りし」が「うきめかづきし」「なにうらむらむ」が「何かうらみん」になっている。

- (8) 井上新子『狭衣物語』における歌ことばの形成と中世和歌への影響―女二の宮の屹立する孤独とことば―（『狭衣物語が拓く言語文化の世界』、狭衣物語研究会編、翰林書房、二〇〇八年）を参考にした。

受贈雑誌（七）

日本語文化研究	日本語文化研究会
日本語学論集	東京大学大学院人文社会科学系研究科国語研究室
日本語日本文学論叢	武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日文学専攻
日本大学大学院国文学専攻論集	日本大学大学院文学研究科国文学専攻
日本語と日本文学	筑波大学国語国文学会
日本文学会誌	盛岡大学日本文学会
日本文学会学生紀要	盛岡大学日本文学会
日本文学研究	大東文化大学日本文学会
日本文学研究誌	大東文化大学大学院
日本文学ノート	法政大学国文学会
日本文学文化	宮城学院大学日本文学会
日本文学論究	東洋大学日本文学文化学会
日本文学論集	國學院大學國文學會
日本文藝研究	大東文化大学大学院日本文学専攻院生会
日本文芸論稿	関西学院大学日本文学会
日本文芸論叢	東北大学日本文芸談話会
	東北大学文学部国文学研究室